京都発！ごみ減量情報誌

こごみ日和79

京都市ごみ減量推進会議・会報誌 2019. 春

特集：いま問題は、プラスチックだ。

地域活動レポート①：「えっ、生ごみの水キリ　やってはらへんの？」
～山科区地域ごみ減量推進会議～

地域活動レポート②：我がまちへの愛着と誇り！地域ぐるみで環境活動を実践
～西京区地域ごみ減量推進会議～

Hand in Hand：合言葉は「レジリエンス」
～しなやかで強い　ひとづくり・まちづくりをめざして～

なごみ日和：着物を受け継ぐ
KBS京都 アナウンサー　海平　和

人と物と。織りなす「もっぺん」物語 第８回：
イースト・ビレッジ・ギターズ（East Village Guitars）

地域活動レポート③：ごみのマナー、小学６年生と共に考える
～修学院第二地域ごみ減量推進会議～

横大路学園に一日で集められる容器包装プラは、
およそ250kgの袋 約45袋。
市全体では年間で約9,000トン

ごみにまつわるこの数字なぁに？

前年比25万トン増

答えはWebへ！

※トップページ「よもやま話 ごみ減のごみ袋」をご覧ください。

「こごみ日和」は、京都市役所、各区役所・支所のエコまちステーション、京都市図書館、京都生協（市内店舗）などで手に取っていただけます。
最新号・バックナンバーもウェブで公開中！　http://kyoto-gomigen.jp/

手をとりあって　ごみを減らそう！
京都市ごみ減量推進会議

ごみ減　検索

容器だけでなく、周りを見回せばプラスチックだらけ。便利なのですが…。その扱いが今、問われています。

特集

いま問題は、プラスチックだ。

連日、マスメディアを賑わせている、プラスチック（以下、プラ）。

特に海洋汚染への影響が急浮上。地球環境はもちろん、人体への影響までも指摘され、世界のあちこちで削減の動きが加速している。Plasticsの語源は、ギリシャ語のプラスティコスで「成長する」とか「発達する」という意味を持つそうな。自由に成形でき、生活用品、建築資材など幅広く使われ、恩恵をもたらした。環境問題として急浮上した今、「脱使い捨てプラ」が急がれる。

京都市のプラスチック減量への取組

身近なところで京都市ではどうなのか。新島智之氏（京都市環境政策局ごみ減量推進課）を訪ねた。

京都市のクリーンセンター等に搬入されたごみは41.3万トン（2017年）。そのうちプラは約13%にあたる5.5万トンだという。これまで市が推進してきたプラごみ減量対策のいくつかを紹介しよう。

◆協定方式を軸にレジ袋有料化を実現

レジ袋有料化。それは削減の最も有効な策の一つ。京都市においては、事業者の賛同を得て2015年10月、政令指定都市では初めてとなる店舗面積が1000㎡以上の市内食品スーパーで有料化を実施した。

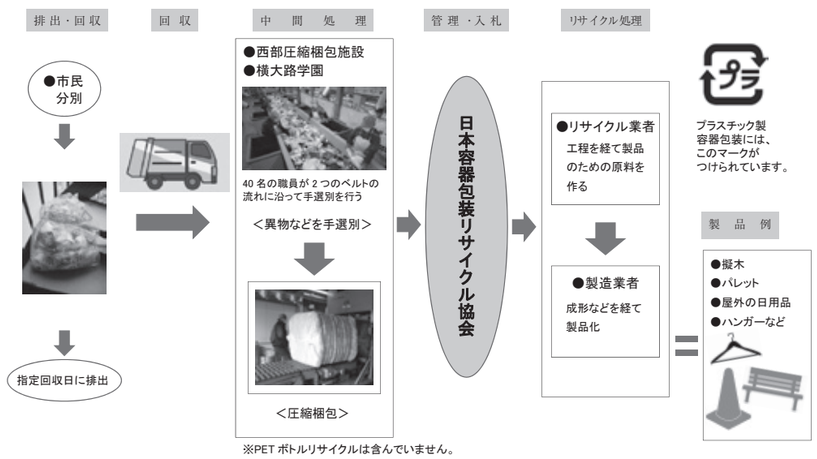
その先駆けは、2007年１月に始めたジャスコ二条店だった。市民団体・事業者・行政、３者の「レジ袋削減協定」（正式には「マイバッグ等の持参促進及びレジ袋の削減に関する協定」）というユニークな形で、2018年度までに32の事業者、11の市民団体と協定を結んだ。この動きに刺激され、協定を結ばずとも有料化を実施した店舗もあった。市民団体を取り込んだこの協定は「京都方式」と呼ばれ、全国に波及している。

取材に対応してくださった新島智之氏

◆マイボトル推奨等サポート事業

街のあちこちにあるカフェで使われる紙製またはプラ製の使い捨て容器。使い捨てられる容器の減量を実現するため、持参したマイボトルに対応する店舗を京都市が推奨店として登録し、ホームページなどで広報活動を行う事業を2015年にスタート。当初は11社61店舗だったが、今では13社241店舗に拡大した（2018年12月）。有名カフェはもちろん、コンビニでもマイボトルの対応を進め、ローソンが賛同し、約170店舗で対応している。

図１　「京都市の容器包装プラスチックリサイクルの流れ」



※PET ボトルリサイクルは含んでいません。

横大路学園
京都市の家庭ごみとして排出される「プラスチック製容器包装」の中間処理施設の一つであり、障害者の就労支援を行う事業所。混入された異物は、ここで働く知的障害を持つ方々により手作業で選別され、その後、圧縮梱包される。１包はおよそ250kg。ここでは、１日に約45袋送り出される。

今後、力を入れたいとしているのが、PETボトルの削減を狙ったマイボトルの普及。前述の推奨店を拡大するほか、上下水道局が観光地への設置を進めている「京（みやこ）の水飲みスポット」との連携など、利用機会の拡大だ。観光客にも積極的にPRしていきたいとしている。

◆家庭ごみ有料指定袋にバイオマスポリエチレンを配合

年間8,000万枚製造されるごみ有料指定袋。当初は、100%石油由来のポリエチレン製だったが、2018年から植物由来のバイオマスポリエチレン10%を配合した袋に切り替えた。CO_2削減効果は500トン（年間）。他にも食品包装や日用品の詰め替え容器に利用されるなど、環境への配慮によるバイオマスポリエチレンの活用は身近な存在になりつつある。

◆京都市の容器包装プラリサイクルの流れ

今では当たり前になっている分別回収。容器包装プラに関して、たびたび耳にするのは「本当にリサイクルされているの？」「燃やすごみと一緒に処理しているのでは？」などの声。図１（左ページ下部）に従って、説明するとしよう。

容器包装プラは、資源ごみとして回収された後、市内の中間処理施設へ運ばれ、異物※などが選別される。そして圧縮梱包され、日本容器包装リサイクル協会へ引き渡される。ここでリサイクル事業者の入札が行われ、落札した事業者が引き取り、製品の原料等になる。次は製造業者へと渡り、成形などの行程を経て、擬木、パレットなどの製品となってよみがえる。

※ 異物とは、容器包装プラ以外のごみ（ハンガー等のプラ製品・金属類・繊維など）や、汚れがひどいもの等が該当します。異物除去は手選別で行われており、注射器や刃物の混入により職員にケガが発生しているほか、再資源化施設では、スマホバッテリー等の混入により、発火事故が起こっています。本施設は環境施設見学会「ごみ減量エコバスツアー」にて見学できます。お問い合わせは各区役所・支所内のエコまちステーションへ。

保津川のごみ拾いを起点に、問題解決に向けて活動

次に登場いただいたのは、プラごみ問題の解決を目指し、最前線で行動する原田禎夫氏（大阪商業大学公共学部准教授）。

使い捨てプラは、減量に向けた世界的な取組が緊急課題となり、EUなどでも脱使い捨てプラの動きが広がっている。

大学時代から水の研究をしていた原田氏は、保津川のごみを注視するようになり、2007年に「NPO法人プロジェクト保津川」を立ち上げた。

京都府の中央部丹波高地に源を発し、亀岡市から京都市に至る11.5キロメートルの峡谷の美と舟下りで有名な保津川。1606年角倉了以により開削され、京都への物資輸送を担い、明治期以降、嵐山へ至る「保津川下り」は観光客の人気コースとなった。

ライフスタイルの変化に伴い、川辺に流れついた容器包装ごみ（アルミ缶、PETボトル、レジ袋等）が目に余るようになり、「このままではいけない」と、危機感を抱いた船頭さんたちが、ごみ拾いを始めた。その動きに地域住民も触発され活動は広がっていく。

「プロジェクト保津川」では、川べり周辺のごみを拾う「保津川クリーン作戦」をはじめ、数々の事業を重ねるなか、マイクロプラスチック汚染の現状をつかみ、その源となる「プラスチック減量の重要性」の認識を高めた。

「NPO法人プロジェクト保津川」代表　原田禎夫氏（大阪商業大学公共学部准教授）

保津川に関わる環境が森や街、そして海へと繋がること、その連携なしには汚染問題は解決しないと広く理解を求めてきた。

2012年８月、海のない亀岡市で「第10回海ごみサミット保津川会議」開催にあたり、実行委員会を立ち上げ、さらに、子どもたちが中心となって活動する「海ごみ探偵団」事業を通して、河川から海へと至るプラごみ問題の深さを認識するものとなった。

“脱使い捨てプラを急げ！”と、繰り広げる前向きな活動から目が離せそうもない。

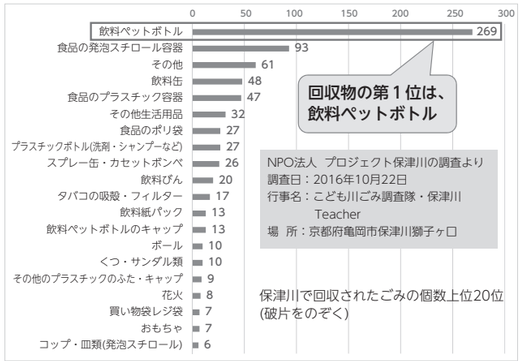
「脱使い捨てプラへ」。今すぐ私たちにできること

●レジ袋を減らす
生活者としては、レジ袋を断り、マイバッグでの買い物の徹底。行政としては、レジ袋有料化導入などの働きかけ。

●PETボトルを減らす
生活者としては、マイボトルを携行する習慣を付け、マイボトル対応の店を利用し、マイボトル対応していない店へは、働きかける。また、水筒などの活用でPETボトル飲料の購入を控える。お茶を急須で淹れて楽しむ。
リーフ茶の普及で、ペットボトルを減らそう　http://kyoto-leaftea.net/
行政としては、マイボトル対応の店舗を増やす。給水所設置の検討。

まずは、レジ袋とPETボトルを減らすことから始めたい。

京都府亀岡市保津川水系で回収された放置ごみ



森田知都子（平成30年12月取材）

地域活動レポート①　～山科区地域ごみ減量推進会議～

「えっ、生ごみの水キリ　やってはらへんの？」

～エコの和を広げ続ける山科区ごみ減量推進会議の挑戦～

11月23日（祝）、秋晴れの澄みわたる空の下、「ふれあい“やましな”2018区民まつり」が山科中央公園で開催されました。今回はここで、2013年から出展を続けている山科区地域ごみ減量推進会議（以下、山科区ごみ減）に焦点を当て、これまでの活動や活動の楽しさ、今後の展望など、幅広くお話しを伺いました。

エコ活動を通じて人の和を広げたい

今回、インタビューに応じていただいたのは、山科区ごみ減代表の村西法子さんと、山科区ごみ減と共に活動する山科エコまちステーション（以下、山科エコまち）の平尾隆弘さん。午前中のインタビューですが、すでにブースの前にはたくさんの人が集まっています。

ふれあい“やましな”2018区民まつりにてブース出展

今年は関心が高まっている「食品ロス」削減を目指し2種類の啓発を用意。ブース内では、食品ロスの実態調査アンケートを実施し、参加者には「めぐレット※1」を、ブースの外でも、会場を歩くお客さんに声をかけ、食品ロス削減の啓発チラシを配り、3キリ※2など自宅で出来る取組を呼び掛け「水キリネット」を差し上げました。来場者の中には「トイレットペーパーは欲しいけど、水キリネットはいりません」という方もいらっしゃるとか。そんな時にはすかさず、「えっ、生ごみの水キリやってはらへんの？」とやさしく語りかける村西さん。やわらかい口調と京都弁らしい鋭い切れ味が相手の心を捉えます。このような区民まつりでの活動の他、古紙回収や使用済てんぷら油の回収など幅広く活動を展開する山科区ごみ減。活動を通じて、一人でも多くの方にエコに関心をもってもらいたいとのこと。

あ～もったいないな～

国によると、日本の食品ロス（手つかずの食品や食べ残し等）発生量はなんと年間646万トン（2015年度推計）。この値はWFPが発表している世界全体の食糧援助量（約320万トン）の2倍に相当します。京都市でも年間6.5万トン（2015年度）の食品ロスが発生し、うち、家庭からは3.1万トンも発生しているそうです。山科区ごみ減は山科エコまちと連携し、このような食品ロス削減活動にも力を入れています。

昔、ストローは麦わらでできていた！

これまで、山科エコまちと協力しながら、環境関連施設の見学や、資源物回収等さまざまな啓発活動を実施してきた山科区ごみ減。最後に、今後の活動について聞いてみると、「プラスチックストロー、あれは何とかせなあかんね。昔、ストローは麦わらから作られていたんやで」と村西さん。こちらは「え～～っ！？」。今回のインタビューの中で一番の衝撃でした。調べてみると、ストローの原材料は麦の穂を切り取った残りの麦稈（ばっかん）、すなわち麦わら（straw）そのものが利用されていたためこの名前で呼ばれるそうです。さすがは、山科区ごみ減！山科区ごみ減のユニークで楽しい活動は、どんどんエコの和を広げていきます。

山科区ごみ減代表の村西法子さんと山科エコまちスタッフの平尾隆弘さん

※1　市内の学校給食で飲み終えた牛乳パックを再生したトイレットペーパー

※2　買った食材を使い切る「使いキリ」、食べ残しをしない「食べキリ」、ごみを出す前に水を切る「水キリ」、これらの3つの「キリ」を合わせて生ごみ3キリ運動という。

高野拓樹（平成30年11月23日取材）

※山科区地域ごみ減は山科区内の13の地域ごみ減が集まり山科区全体のごみ減量に取り組んでいます。

地域活動レポート②　～西京区地域ごみ減量推進会議～

我がまちへの愛着と誇り！　地域ぐるみで環境活動を実践

11月17日（土）、西京区の秋の恒例行事となった「西京区民ふれあいまつり」が、今年もホテル京都エミナース及びラクセーヌ周辺にて開催された。今年は、西京区内の17の地域ごみ減量推進会議（以下、地域ごみ減）が合同で啓発ブースを初出展。活動紹介のパネル展示や、ごみの減量について楽しく学べるエコクイズなどを行い、家族連れなど多くの人で賑わった。

今回は「京都の西の玄関口」として、美しいまちを守り、次世代に伝えたいと活動する、西京区地域ごみ減代表の山村和子さんにお話を伺った。

左から、洛西エコまちステーションの森川善孝さん、桂坂地域ごみ減の小田根晶子さん、西京区地域ごみ減代表の山村和子さん、桂川地域ごみ減会長の吉本保さん

西京区内すべての学区でごみ減が活動

「やっと西京区すべての学区の地域ごみ減が揃いました」。そう話す山村さん。1999年に西京区初の地域ごみ減が発足、当初、桂東・桂川・桂坂・大原野の４学区であったが、徐々に活動の輪を広げ、2016年に17学区すべてに地域ごみ減が設立された。現在、てんぷら油の回収、古着・古紙の回収、地域の一斉清掃等に加え、地域ごとに、落ち葉のたい肥化、フリーマーケット、子ども食堂、エコ工作など、さまざまな活動を展開している。今回のふれあいまつりでは、各地域ごみ減のメンバーが当番制で出展ブースに立ち、来場者に声をかける姿が見られた。

エコクイズでごみ減量をグッと身近に

ごみ減のブースを訪れた人々に挑戦してもらうのは、食品ロスに関するクイズ。日本の食品ロスの発生量を知ってもらうだけでなく、「一世帯（４人家族）で１年間に発生する食品ロスを金額にするといくら？」など、身近な内容として捉えてもらえる出題になっている。クイズの参加者からは「へぇ～、年間６万円も捨ててんの」「もったいないことしてるんやなあ」と驚きの声が上がっていた。

「ごみ出しマップ」作成でごみ減量啓発

西京区地域ごみ減では、ごみ減量を呼びかける第一歩として、2010年に「正しいごみの出し方MAP」を作成し、一部地域に配布した。イラストを多用してごみ分別を説明するこのマップは、地域の人々や転入者から「とてもわかりやすい」と大好評だったという。翌年には、西京区の全学区へ配布するに至り、今も区民に重宝されている。

「正しいごみの出し方MAP」

「『ペットボトルを洗って出すと初めて知りました』とマップを見た男性に言われました。昔は“ごみ捨てはお母さんの仕事”と他人事のように思っている人が多かった。でも、最近は男性も子どもも、少しずつ意識が変わってきているように思います。マップが少しでも意識改革に役立ったのなら嬉しいですね」。

多くの来場者でにぎわいを見せるごみ減ブース

幅広い世代を巻き込み“地域ぐるみ”で

山村さんの地元、西京区桂東地区は、1997年度に京都市の「まちの美化推進住民協定」を結んだ第１号である。当時から「京都の西の玄関口」として、まちの美化に熱心な地区であり、現在も桂駅前のプランターに花を植え、日々の門掃きや一斉清掃などを続け、美しいまちづくりを推進している。

「われわれの活動は、子どもからお年寄りまで、多くの人を巻き込んで地域ぐるみでやることに意味があると思っています」と山村さんは言う。一人ひとりがごみ減量の意識を持つことで、地域全体の環境意識が高まる――という信念のもと、「これからも日常生活の身近なところから、ごみ減量につながる活動を続けていきます」。17の地域ごみ減の結束が、今後の活動の大きな原動力になるに違いない。

藤原幸子（平成30年11月17日取材）

※西京区地域ごみ減は西京区内の17の地域ごみ減が集まり西京区全体のごみ減量に取り組んでいます。

Hand in Hand

合言葉は「レジリエンス」
～しなやかで強い　ひとづくり・まちづくりをめざして～

世界最大規模の慈善団体であるロックフェラー財団は、2013年、創立100周年を記念して、世界100のレジリエント・シティ（100RC）を募集しました。アメリカ主要都市の他、アジアではソウル，シンガポール，バンコク、ヨーロッパでパリ、ロンドン、ローマなど有名都市が選ばれる中、京都市も2016年に100RCに選定されました。レジリエント・シティとはどんなまちなのか？何を目指すものなのか？今回は、レジリエント・シティ京都市統括監（CRO）（元・京都市副市長）の藤田裕之さんにお話しを伺いました。

藤田裕之CRO、京都大学卒業後、京都市役所に勤務。2013年京都市副市長、2017年から現職。

「レジリエンス」と「レジリエント・シティ」

「レジリエンス」とは、元来、物理用語として、回復力、弾力性などの意味で用いられています。つまり、外からの応力に対して、元に戻ること。このため、「レジリエント・シティ」は、地震などに強い建物を連想しがちですが、藤田CROは言います。「レジリエント・シティは、決して物に対してだけではないんです。ポキッと折れないしなやかな『心』の強さ、『打たれ強さ』の意味も含みます。」「レジリエンスな人格をどう形成するか、そのために必要な社会システムは何か、さらに元の状態以上に良くするためにはどうすべきか」が問われているのです。

なぜ京都は1200年も繁栄し続けてきたのか？

応仁の乱や天明の大火災をはじめ、幾度となく存亡の危機にさらされてきた京都。平安建都から1200年以上も経過した今まで、なぜ京都は繁栄し続けてこられたのか。

「これこそが当時の京都市にあったレジリエンスな社会システムと市民の『心』にあると思うんです。例えば、明治になって都の地位を失ったとき、人口が一度に3分の2に激減しました。にも関わらず、明治の京都策といわれる復興事業を成功させましたね！」現在の地方人口減少の問題を事例に、藤田CROはさらに続けます。「首都圏への人口集中によって、今や地方消滅という言葉まで出てきています。減り続ける人口を増やすことは確かに大事だけど、少子化をそのままにして、京都市だけが周辺都市からの流入で人口を増やしたところで、周りの都市が人口減少したのでは根本的な解決にならない。自分だけ良ければいいではダメ！」「明治の京都策、つまり、番組小学校や琵琶湖疏水と本格的な水力発電、これらは今でも京都の活性化における大きな財産になっています。そして、これらは人口減少を受け入れた上で、その先を見据えた、ピンチをチャンスに転換する施策だったんじゃないかな。」

各都市のCROが集う戦略会議。2018年4月シンガポールにて

一人ひとりの心のレジリエンスが大切

「番組小学校が基盤となった学区コミュニティの役割は非常に大きい。京都では今でも学区ごとに運動会や防災訓練が行われています。でも、地域コミュニティの希薄化の波はこの京都にも確実に押し寄せています。」と藤田CROは指摘します。さらに、「レジリエンスの基本は、“みんなで助け合い支え合う”という、ある意味当たり前のことなんです。」「ごみの問題も同じですよね。自分さえ良ければいい、今さえ良ければいいという考えが膨れ上がって大きくなったのが、ごみ問題だと思うんです。先の人口減少問題やごみ問題の他、地球温暖化やテロなど、都市を取り巻くストレスは多種多様で、極めて困難な問題も含まれます。だからこそ“レジリエンス”、特に人の心のレジリエンスが重要なんです。そのことをまずは一人でも多くの人に伝えたい。」

番組小学校：明治維新後、京都の町衆たちの手によって当時の住民自治組織であった「番組（町組）」を単位として京都に創設された64の小学校のこと。

高野拓樹（平成30年12月10日取材）

なごみ日和

KBS 京都 アナウンサー
海平（うみひら）　和（なごみ）

●●第21回　「着物を受け継ぐ」●●

まもなく平成が終わろうとしています。昨年から何かにつけて「平成最後の〇〇」というような言葉を使ってきましたが、いよいよその時が迫ってくると不思議な気持ちになります。昭和62年生まれの私としては少し複雑な思いもあったり…。今年はどんな年になるんでしょうか？

さて我が家の初詣といえば下鴨神社。家族で毎年欠かさず行っているのですが、今年はいつもと少し違うことが。家族揃って、着物で初詣に出かけたのです。

というのも、最近、以前習っていた着付けを再開した母から、着る機会を増やしたいと提案されたから。私自身、プライベートで着物を着るのは久しぶりでした。数年前に着付けを習っていたのですが、久々だと忘れていることも多く、母に手伝ってもらいながらなんとか着ることができました。やはり着物を着ると、より晴れやかな気持ちになると同時に、日本のお正月をゆっくりと楽しんでいるような心のゆとりが得られました。所作が丁寧になるのも着物のいいところですよね。ですが、寂しいことに大勢の参拝客で賑わう下鴨神社の境内で着物姿の方を見かけることはほとんどありませんでした。

近年、レンタル着物店などで気軽に着ることができ、観光客なども含め着物姿の方を街で見る機会は増えているような気がしますが、着物の市場規模は縮小しています。日本の良さ、伝統、技術を守っていくためにも、というと少し大げさかもしれませんが、着物ほど楽しめる継承ってないのではないでしょうか？私自身、親から受け継いだものを気に入って着ていますし、自分で購入したものも次の世代に引き継ぎたいなとわくわくする期待を持っています。時代を越えて、受け継ぐことができる着物。今年はもっと楽しみたい！！

海平　和：京都市出身、2010 年 KBS 京都入社。テレビ「京スポ」「news フェイス」、ラジオ「栢木寛照熱血説法こころのラジオ」などに出演中。

人と物と。織りなす「もっぺん」物語　第8回

ギター販売・修理　イースト・ビレッジ・ギターズ（East Village Guitars）

ギター修理に定評があるイースト・ビレッジ・ギターズは、オーナーの東村 章弘さんが切り盛りする店だ。ヴィンテージのエレキギターやフォークギターを中心に、弦やエフェクター（ギター音を変化させる機材）なども充実、初心者用に手頃な価格のギターやウクレレが置いてあるのも嬉しい。

ギターは、ネック（棹）と呼ばれる部分が少しずつ曲がってくる。弦の張力や気温・湿度などが原因で、そのままでは満足な演奏ができない。エレキギターのネックの内部には予め鉄の棒が入っており、その角度を修正することで、元の真っすぐな状態に戻すことができる。ペグと呼ばれる糸巻きやフレット、ピックアップ（弦の振動を電気的信号に変える装置）なども修理･交換可能で、「自分にできることなら何でもします」と東村さん。電気系統の修理にも可能な範囲で応じてくれる。

店奥の工房には、多種多様な工具が並ぶ

ギターを愛してやまないオーナー、東村さん

時折、若い人が年代物のギターを持ってくる。聞けば、親が使っていたものを譲り受けたと言う。「長年眠っていた楽器が蘇るのは嬉しいですね。昔の楽器は、素材が良い。使わないからといって捨てるのは本当に惜しい。是非、修理をして弾いて欲しい」。楽器を長く愛用するためには、アフターケアは必須。東村さんの確かな技術は、プロのギタリストにも喜ばれている。

最後に、東村さんお手製のエレキギターを聴かせてもらった。繊細で優しい音色は、ギターを愛する人の心にずうんと響く、愛情に満ちた調べだった。

▶East Village Guitars（イースト・ビレッジ・ギターズ）　〒612-8438 京都市伏見区深草フチ町1-4　Tel＆Fax: 075-647-2633

松村香代子（平成30年12月15日取材）

編集・発行／京都市ごみ減量推進会議 普及啓発実行委員会 〒612-0031 京都市伏見区深草池ノ内町13 京エコロジーセンター活動支援室内
TEL:075-647-3444／FAX:075-641-2971 E-mail: gomigen@kyoto-gomigen.jp URL: http://kyoto-gomigen.jp/

地域活動レポート ③ ～修学院第二地域ごみ減量推進会議～

ごみのマナー、小学６年生と共に考える

残暑厳しい９月末、修学院第二小学校では、６年生の総合的な学習の時間に「安心・安全一乗寺」をテーマとした授業が行われました。「自分たちの地域のことをもっと知りたい」と児童自らが発案。ごみ・路上駐車・道路・河川の４つのグループに分かれ、事前に校区内を調べ歩き、気付いた点や疑問等をまとめ、地域の方に発表しました。

ごみグループの講師には修学院第二地域ごみ減量推進会議（以下、修二地域ごみ減）の会長 津幡 幸道さんが招かれ、12名の児童と共に、ごみ出しのマナーや不法投棄について活発な意見交換を行い、交流を深めました。

学年主任 村中恵美子先生から、授業の趣旨説明と地域の方々の紹介がありました

マナー違反を減らしたい

６年ろ組の７名による『みんなが気持ちよくすごせる町にするために～ゴミについて～』の発表では、ごみ出しの問題点として、①分別をしていないごみ袋がある②黄色い指定袋に入っていない③カラス（防鳥用）ネット※があるのにその中に入れていない、またはカラスネットが設置されていない、などの指摘があり、多くのごみ回収拠点でマナーが守られていないことが報告されました。

続く６年い組の５名による発表、『よりよい町にするために～一乗寺 ごみ問題～』では、落ち葉や側溝に捨てられたタバコの吸い殻が、大雨の時に排水口に集まり水が溢れて危険だという意見や、ごみのポイ捨てを減らすためにコンビニなどでのイートイン（飲食場所）を増やしてはどうかという意見が出ました。また、カラスにごみを荒らされないために、前日のごみ出しをやめるなど、どちらの班でもごみ出しのマナー向上を訴える意見が出ました。

６年い組の発表の様子

不法投棄ゼロを目指して

校区を調べ歩く中で、粗大ごみが正しく捨てられていない現状も目にしました。修二学区では、５年程前から左京エコまちステーションや東部まち美化事務所と協力し、粗大ごみの放置が多い場所に不法投棄防止を呼び掛ける看板を設置。巡回を増やした結果、不法投棄は減少傾向です。津幡会長は、「放置ごみが一つでもあると『地域の人はこの場所に興味がないんや！』と思われて、不法投棄がどんどん増えていきます。この悪循環をなくしたい」。小学校での環境活動も、その想いで続けています。「とにかく、自分たちの地域に興味関心を持って欲しい」。熱いメッセージを受け取った12名は、自分たちにできることについて考え、授業の最後に発表しました。

不法投棄の現状を伝える津幡会長

自分たちにできること

ごみ出しのマナーを守ってもらうために、①啓発ポスターを作り、回収拠点に掲示する②門掃きを家族みんなで行い、美しく安全な地域づくりに貢献する③ごみ出しのマナー向上やポイ捨て禁止を呼び掛け、啓発グッズを配る。

修二地域ごみ減の皆さん。右側から、津幡会長、上田將さん、雨宮万里子さん）

６年生の堂々とした発言に、地域の方々や先生方からは大きな拍手が起こりました。「自分たちに何ができるのか。現状は？困っていることは？それらを認識し、社会参加できるきっかけになれば」と小田木あけみ校長も願います。

この授業がきっかけとなり、６年生全員でごみのマナー向上を訴える缶バッチを作成するなど、児童たちの意識も変わり始めています。自分たちの地域のことを考え、行動する。世代を越えた活動の輪が、住みやすい修二学区を作る大きな原動力となっています。

※カラス（防鳥用）ネット…京都市の各行政区を管轄するまち美化事務所もしくはエコまちステーションに申請すると無償で貸与されます。貸与の条件等は、環境政策局 循環型社会推進部 まち美化推進課 TEL: 075－213－4960 へ。

松村香代子（平成30年9月28日取材）

植物油インキで印刷しています。 VEGETABLE OIL INK
この印刷物が不要になれば「雑がみ」として古紙回収等へ！